

唐揚げが降った日

岐阜西中学校 3年 丹野 佳南

「唐揚げ降ってこないかなー」

私の最期の仕事だと思ったのです。

私の孫は病気で、長い間入院生活を送っています。この子の両親は仕事が忙しく、なかなか会いに来ることができないので祖母である私が時々顔を出しています。今日も会いに行ったのですが、その時の孫は落ち込んでいるようにみえました。どうしたの、なにかあったの、と私が聞くと、孫は

「唐揚げが食べたい！」

と元気よく叫びました。この子は食べることが大好きで、入院前は毎日笑顔で唐揚げを頼張っていました。私はこの子をおかわいそうに思い、なんとか元気づけようと嘘をついたのです。

「唐揚げかあ、懐かしいわね。私が子供の頃、空から降ってきたことがあったわ。半年くらいで収まったけど。あときは驚いたわ。外出禁止令が出されたり、唐揚げ専用の傘が作られたり。でも楽しかったわね。」私が話すと、この子は目を輝かせました。「いいなあ。唐揚げが降ってくるなんて！考えただけでお腹減ってきちゃう！」とよだれをたらし始めました。罪悪感が湧いてきました。

「あーあ。唐揚げ降ってこないかなー」

孫はうっとりとした表情で空を見上げました。私はここで唐揚げを降らせることに決めたのです。

とは言ったものの、私は魔法使いではないので本当に降らせることはできません。病院の屋上から大量の唐揚げを投げる、という手も考えましたが地面に落ちてしまった唐揚げを食べることはできないですし、掃除も面倒です。いろいろ考えた末、糸か何かに唐揚げを吊り下げて、私の上から動かすことにしました。思い立ったら即行動。すぐに唐揚げを買いに出かけました。三軒ほどスーパーをまわったところ、充分な量が集まりました。大量の唐揚げをかかえてあの子の笑顔を思い浮かべながら帰路につきました。

当日、私は意気揚々と病院へ向かいました。いつもはあの子の病室へ直行するのですがこの日は違います。屋上へ直行しました。(あの子へは事前に「今日はおそらく唐揚げが降る日よ」と言っておきました。見てくれないと意味がありませんからね)。早速実行しました。たくさん唐揚げが吊り下がった糸を屋上から放り投げました。喜んでくれるかな、びびくりするかな、と考えながら。「ほいつ、ほいつ」と支えているうちにあの子の声が聞こえてきたのです。「えええ唐揚げが降ってる……？夢なのかな。まさかさっきおばあちゃんから送られてきたのってまじなの！やばすぎ！おいしそ

お……」どうやら喜んでくれているようです。私自身もとても楽しく、無我夢中で唐揚げを降らせていました。しばらく降らせていると、病院のスタッフさんが慌てた様子で屋上へ上がってきました。私はこっぴどく叱られてしまいました。とりあえず話を聞きましようというところで階段を下りていた時にそれは起きました。唐揚げを触った手は油でとてもぬるぬるしていました。階段の手すりがかめない程に。私ももう高齢の者です。足を踏み外して階段から落ちてしまったのです。

それからはもう、あなたの予想の通りです。無事に骨を折り、ここの病院に入院です。私ももう年なんだな、と実感してなんだか悲しくなりました。でもうれしいこともあったんです。あの子が時々お見舞いに来てくれるんです。この間なんかは「唐揚げ、めっちゃびっくりしたけど楽しかった！ありがと！」って言うてくれたんです。とっても嬉しかったです。頑張った甲斐がありました。

嬉しいこともあるんですが、やっぱり入院生活は退屈です。だから時々思うんです。「とろろそば降ってこないかなー」って。